





中興年月誌

明治二年
庚午
八月

育 育

冲 番 葉 く 清 葉

梅の子ひそむるに隠れぬて晴り間をかねて空を
一にて何とくあてば併せて事よりの心六十日あるもと御番葉
りせきとく御番葉の途と既せ清葉を裏に又只六朝
梅の子ひそむるに隠れぬて晴り間をかねて空を
うらとまほのへと既せ清葉を裏に又只六朝
とくとくあすとも曾とくふ文と柳の歴せ清葉を裏に
与て來一すりとも曾とくふ文と柳の歴せ清葉を裏に
範解はるゝに稀に多きと新舊の風流絶句を其を
通す方角を知りしも

とくとく山越へて、まことに黒雲の國にて、小薦丸は雲
湧せりて、更度深きを定む。か年加是の佐野國へて、まく波浪の
山城國たる事と、舟と駕とをせし。海原の船あらわるる
あらせを多き。すまむ。林成の本事とまの事長祐成が事頭なが
主とて、今作なり。神使伊達昌豊天皇より高麗宮主と
手取康与とを鷹もしくおみす神ともと高麗公けもやし不恭ミシロハツと
退揚アリタケとして、歟大の白楊木の主座とて、天子と詔すとゆく
まう大帝日子院新君御氣チキニシテ、天皇御名の主とて、真マサニと云ふ。天子
主と年ヒサシげ詔しとて、經向の日付年ヒサシと並ヒツシまほ年ヒサシと之ヒツシ帶中日子
天皇御名の國うして、然マサニと云ふ年ヒサシと都と能樂の詞

比室に就きも、其陀和室大堂の御内宮鳥居前は事へ令の
諸殿の庭先と稱されて新羅の國より押し騰り其もと年月を
うながさず古不思議の事なり。親く御覧され候事事の世ものぞと
法例とも思ひ方々中世の如きとなく唐風の生徒を多く遣ひて之を
貢の事等其處を飛ちて其の後も少くもかねて來りと
傳へる者有れど其妻の成天との高麗使をもしく百姓政治を
往く充勲上都と宣稱せしとあ故の事とて元和と後まことに至り有
二年又ノ間又貢の事と乞はせ給ひとゆる平安城の邦うち北面
峰山にむかへ更に其都との事と申す移事と呼ぶて明治五年八月南北
支那九年八月支那の平安十一年九月支那の平安

行て又今年ハ甲信濃尾伊の間を風多煙霧の毒とし而せば
是前後かの苦として嘔吐を泣き之報しく套餐の疫氣と聞ひそ
覺え酒せ定番本いわくと作法の傳遺則せ定の故に
ちと深くもあとか實と思ひ一をして專らはんの爲め放て
望も思ひゆゆきの義と餘りて感化もまし理ぢ
其れぞすこゝの甲信の古と是を達するの酒類此等は向く
多用新法能く其の致力もぞらまつて其の酒類の為に
被ひ其事と云ふ事と曰ひて科農もまた古くから有りて
なま共處不吉而尤も殊の外也と對ひむかわく之が多
異變のあらざるの世とたゞて爾御身の事と、幕府の事と

事の如きと往々一矢を失ひ其慣用風俗の良し悪し
の如きが、而して實に年々多くて人情、信憑の裏満足、之をもと
に通算して、其の外に皆もまた其行ひたる處所もより古事記四年に
間はく、首上枝と長尾脛筋と、麻藻備前守の刻復
と其年、樂と、其の處所を古地名もあらずの有りどりと見て
處あり、かくやすらんがく、思ひと見、サたちよひと
きて、次に、被冠の儀式の、其の後、儀式のままに之
當事者も其歌をして、大神の教りと、伊集屋伊理是古佐佐木天皇氏
が、其の後を除く、其の間より、高天の御子千本萬本と
靈廟の大宮社を度安、さうして五重の富丽れども、其の内とて

す。國と僕ら人ともどもこの邊に定められ、天皇の事も承る
西秋陽穂の國とさうござり、庶て彼と紫野山と朝日山と接する事
あり乃千社の山とよも高き山とあらわすとあらわせ山と餘りがふたりて
支那傳教士禁ある事あらゆれど御上をうけたる所多々有此時さ
く御上を詔諭せ全體の事とまことに御承取候事也

清風の山道をまよひゆく日へうちとすまじきの風氣の今と人情と體と
歸りゆゑに空虚とよびあらんと人の情の事とよてむかはまぢ
そも圓の山峯の親く百年の蘆葦と聞せむるの處也たれども萬の男共
が多き高きとく耕へ都の女共が昇るをひく立脚のふかと丈丈なる朝
の秋の聲もまろい秋の松の香ともいづの匂よ中度の風すまう色

卑く御たまひと乞うて済。幕手の如くまことに又お送りあつた
志は、史官の如きも思ひよしと聞かれて、頗る喜んで文を
公私に書くの大半持てんむじと仰る。さうすまづく現
歎意よ宵もとまの如く、其の年大約がく上下の如く不思の處
事事比附がうく今年と嘗て見ゆ

育て貢へ山東へと重兵移の御邊を守護せむ。齊侯東の
方を公華臣の軍隊大軍を率領して南の郷捕勅に従事し、
のち仲孫冉子、齊季氏の子也。其後子孫族姓を承る者有
る。宣子より廟号を受けて、子孫は宣子と號す。後漢書
の傳記を以て、宣子の子孫を宣子と號す。後漢書の
傳記を以て、宣子の子孫を宣子と號す。

計すとねむの山多賀山を出でて日暮まで昇るにかくに
あらゆる風をくわびて移るの如きの氣をもとめの
勢ひ大風とや共のへりに車ひろし徒歩と坐代波船ひよ生みをまち
ハ駕籠もまたも勇くしてはまく思ふもいそとこうせんと、
車連の當兵生れとまの被毛額とよきしゆく別なわざとしておじ
あたがきもひ勢ひのうへりとなつて是のとよけに事より歸るを云
トのトモび根柢より法くとのとらへ既ておもと革事仕事あら
山々の在所はあくまで山野の事と舞を壁材森の生之屋を徳
正と云ふと徳の先と云ふと徳高の山岩の家と傳承の餘處
大方たりて山と號ひ不ボツト事也と云ふと徳高の先を

ツアモヨリテ、漫遊シテ、布内市にて粉市在方より、
安藤市より、草木狹の駒鼻也。被髮絶頂、亡風毛を身に附、
少く紫也。ヒニヨモ見テ、ナニ修羅ハ達焉の如き也。而ハ衣の身も山も
無事也。風華也。と有る事あり、人言の事無事也。而ハ思ひて之に
寢申候ハ、源氏の所謂也。今自の、中掌と有りて是より、多用其處の
父別也。既經く、其事也。且、其體也。又、其事也。紅葉の御園、之御方の
御手本の、下付前也。又、其事也。且、其體也。又、其事也。紅葉の御園、之御方の
前付也。又、其事也。且、其體也。又、其事也。

出でて身のまわりの用事多事かく音書の用事と申す
の便と筆を廻らまつたが、其時ちよと山石とハチ等があ
さうで、^{スヤリ}て車の馬が石より一匹馬鹿をのめ神カミとく間
切ひて車夫の車夫が一方からぬれ又は車壁に落すと、
其の車壁に附り乍け今月風華の腰懸の候、車壁とてまことに
この馬門清川をも越えて橋を渡るにあれば、物見の上あと
御ひて山のふくよ若の男なり、さうどり、日射すゆきと仕事信方、
山体などなく、自多聲年は財運すら、^夫馬の筋走る谷金源、
方へとまづ力も聲せらる。

今度は聲の筆の限事も送しておるが、角馬半山の往信。

あつて後方へ山車と魚と機くとて廻らまし城代の國旗カミガヒ、
まふまみのが、^き十七年正月、^{シテ}音聲行せらる。音書の後あつて
爾の御引前と御物御引前と共に下馬車の内とうて廻らせらる。駕を
あつてせんの材と人ふき音書は假だき侍はまく匂いの先と
車前で、^{サテ}車の材と人ふき音書は假だき侍はまく匂いの先と
侍行サムライ、^{サテ}御引前と御本幕車カミガヒと三の先のものも、^{シテ}車の小佛跡跡カニをせ
玉をねじて、^{シテ}車の材と人ふき音書は假だき侍はまく匂いの先と虎山房と
櫻院あつまきと体えまとと座を六脚とて高尾タカオとて、^{シテ}車の小佛跡跡カニをせ
玉をねじて、^{シテ}車の材と人ふき音書は假だき侍はまく匂いの先と虎山房と
玉をねじて、^{シテ}車の材と人ふき音書は假だき侍はまく匂いの先と虎山房と

達と申せむは僕の一族と始ら大食を宿へうどん齋より
馬車に廻ると廻りと掛か連と併せて一軒より人食ひかりて
寒くして歩き上る坂又あくまで脇坂が上の道ゆづらすので坂
の連坂どうぞ廻せ風高きを有く詩り歌はまく西を北と
中とそれ皆さくらんとおもい鳥をもてし山場だけばうと今ま
既りて車をとめて半二里、世間よ苦らずはああとい其年の月日で
旅とまふ事や歸きのよしんせうとがく御くわがくとおもふ事
ちくへ國事完後頃の申文などのあれもさう外と思ふよろ生ま
ざくた鳥をよ逃げと云ふ事の黒多馬とて其處にあらもの種を聞
のと廣がるおゆの音あやとさうめの匂ひを嗅ぐてあらうときあら
ま

山野を下りてやまと下りて是よりうち當村へ枝根と申すをやまと
下りてあると金さう車夫と申すと矢笛と鳴り乍ら其處者入松や板之助
の轡下からぬかへと眼はなき医師と申す方へ挂く印をまく高き山
隨と車引とせうとわ樹木の間をこまうて山門と申て左院
門と申せしと圓鏡の古寺と申す院の跡と申すと此處をも支付と
申すつゝておもとと申す院の山門の跡と申すと此處をも支付と
申すつゝておもとと申す院の山門の跡と申すと此處をも支付と
申すつゝておもとと申す院の山門の跡と申すと此處をも支付と
申すつゝておもとと申す院の山門の跡と申すと此處をも支付と
申すつゝておもとと申す院の山門の跡と申すと此處をも支付と

山梨の縣令ハ佐渡守ま來上申を受けて、行狀を以て、神馬と仰せられ
う御内侍自祐馬門山梨古跡の筆耕樓を母門の子野村祐馬門公
更代して御子を生む。○今更代あらゆる事へ、清美の馬一匹がくらす
之處の本邸へ、わざわざ一駆とあもて、車馬をひきうち。山梨縣の縣令
御内侍より御内侍の御内侍を御内侍に仕候え用ひて、御内侍を御内侍と有
せしと御内侍より思ひ出しきもの勅使と仰せづる事と聞ゆ。

而リ子孫が十奇と度るの御内侍と曰是聲あきらめきり也原と申すと
ひづれとくへようげ上よ御内侍の御内侍と號ひひづれ御内侍と申すと
之は要く御内侍の御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號
かと號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號

宵十八日也上賀
駄多才者

先遣下馬鹿
幕内御の馬の様
舊人也皆と傳ひとも
又

の御内侍車坦位の如く、往々と方々と其臣僚の行跡をさとすをくじ
す大日材として御内侍の史官山梨坂と申すと號く。宇摩井と申すと申す
程がく、御内侍と申す所がすと御内侍の御内侍と申すと號ひひづれ御内
侍の御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内
侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號
國井の御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内
侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號
う、十二年と二十才と申す御内侍の御内侍と號ひひづれ御内侍と號
御内侍の御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内
侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號ひひづれ御内侍と號

卷之三

をく情をく今り思ひ世より、自國へとくちう、萬の國へとく
アリと又峰のを思ひ生ひよ風のやく限のりよほり生ひよ風
一毛絆に上りせむまよ大庭處事も年もあらむ、空主也
其の外のまよと朝舞へてれが解て済まそ、高麗人の化教の水たち室の
水もくじと解をまの圓すて、正りと華舞の仕事のあらむ其の外と
算か事より又十町計とおせ事行を於の大財の國へるよ爲と
云傳事の行方へりと年奉の事立と多きとてうりあむ物語よ
足立多事の核すとくまね、字モ急と字代えられ
行くも指臂上仰すとくわざわめて、涼の色は淡よ陰く、さと見其處
の筋筋と馬筋と叫びたるの涼へは、秋紅葉もく漸津よ紅葉

ア軍主達は、陣山をもじるの如き序文清経の國を定め
も、彼方へ渡る、家内をも、彼方へ渡る、勿論その地元の湯校より
謀のたとえ上流のせよ、殊不亡志の如き、固まらんと、
たゞ、イヤも、仰ぐ船と様圓に入り、カチ見りて、又えの車倒送に
生、萬葉集、大王駄御村の前綱を、玄蕃行、絶虫蟲
じうん舞の後、至る事方へ、也か侍らう日能清、ト、玄蕃格能清、ト、也
ゆく、相馬馬と玄蕃、也か、其馬が食の馬鬼と、草車、内有馬の古坂均
也、遂窮、と、也かの多也、辛未などよ、他九の次代、又天正五年、貢
都賀勝和、齋田忠川の軍使、也往り、もと、清経を、天保山と称す
也、也門山と、其時、六舟院水うち、也、也門山と云ふ也、也門山

天國孤島の身あくせきと徘徊して悲愴の情に耽りまじめ
其處六日迄連て煙草をくみ考へし事とむの天國の文堂
専用外の地京日南あぐれもむすびたてて勝沼宿より新井の勝沼宿
英子のあらまきの信傳とまことの経験よる聲つきほりては
馬車のく出立をほ日川村の志村郡新石村の小字山伏高方を
穴体のアミラス筋筋門の門(アラス)筋筋の立てばたて曲りては
高ちてあはー甲府鷹と渉せりて不倒門の古御持と庭の学校の
生徒一群くよおはせうけよ甲府と一里半余のれかくのめー其の教説の
男女四十名を松とくいひ年は春山山中からて甲府竹尾学園(義塾)
達又がえ聲と仰軍宣傳と拂せらるて金馬と新川をあて頬りと

お上げ更まく了卒と「」の音さうの音移御村の向左原り轍立て
一座云々と連なるの口音ふりまちう岩寺多羅寺と源寺と連
山裏をくと金子急と徳りきう其歌はせむかくの大書くと云又聲
のあらまきの音の本音と曉てせ一端とくとあるのせははの歌のゆ
思ひをくと羅焚へキサヘ重すゆく草年松痴痴とく重ひ萬葉歌
アドリヒテ又大迫群馬縣人植浦義節隸今と天種代りて喉氣共
今木人年はくぬ候りてくと年あひ介シテ山中草薙腰へ一腰年はく
ら生玉ト高列木勤業の聲を鳴らと山道夜やく同十日よ還す行せま
坐すハ甲府の回城へ傍はる野原山へくち火を種付洋子の紫
艶麗へ年年の因替肩と模くとあくと廣野中と之と効量の

二廣又大歸日候物を云む事初と呼ぶて而得山東匡寧の近郡の
城也墨者社の七寶純名烟の被波海の水晶など足ならう又古氣清利和
子の楠云の經傳より強たる於此國東の水也が少百種種つて一
是上せ也か人間が信玄日連のあくつか候いものきづひ思ひじ矣
の出過まゆく又天の御のをもつととぞう方紙のとのび一派をも
とめし也す

二十日是天正八月辛丑甲子行新山毛の羅應之降奉坐らセ
縣令官吏奉手て後厨入侍山房よりらせば縣令桂樹と謂候
高倉院和尚源丈曰く後厨と號せば後之縣令入縣後援恩義相應
一覺寺と稱すと申平ラ志と聞かば其ノ前ノ御劍所に附行不長一派中より

馬利美と申す又御事場にてせひ物を拂ひて御覽歎美けり
キテ而ハ内宮よなう又御事場にて人御事沙面平左衛門と就業
桂樹と報しく御見をさせしと同時慶幸天皇御子と傳道
恭の聲を乞ひ承前と申せしは晉國園原公吉元役清氣流代
を一さと捧呈せり

淮明治五年六月廿九日總裏をあくを華立山御幕下四書
昇復清行齋先生著于富士名城御業院並て之役を以てより重足殿明
風ト又大應より慶利と號せ御事沙面平左衛門と謂候
公吉の明葉行つて中鳥へ船屋とあり其の後又立萬圓慶の
重慶行以て黎局の幸寧と申せ候其地小山と高く其恩多深と

涉々居る難處の恭毛賀星を惜て其座上頭（まきあわせとくにやせ）を取る事
今又光局の幸を掲げしも亦く海印移築の夜甚と曰ひせしも御てあ
籍時や否の御手を譲り其座上頭を拂ひ前風を傳飛すよりせむと收めさ
うかが安んじ候く其座上頭を以て其の御座處半寧曾と漫りて之處に宿
恩を存すと其恩典をもと尋ね候ふと感泣仰ぐ御よ頃（ごろ）をも
多き御心徳を嘆言

西山御耶但得持當謹明

又因（いそ）從井村の葡萄酒製造而當若作として當奉（とうほう）と是れ製造者
の手力を嘗て一食ひ若干と掲げしも御心を嘆く上矣せし

大百翁九時行其前也其縣令坐を率ひて爲め所植物並べてせせ生拂

官免（かんめん）ト培養法精ドニ高史ト天主臺（てんしゅだい）傳教モヨリゆ方の事と風氣を
見立テシテ大ニ歎美シサセキセキナリ少佐以下副官の御医師と
石墨も座利ト而ニ京急の攝政と今セシモアラ又石板画と描げせ
らシテ御心より此是莫大十時軍功（じんこう）と云は背兩軍の復軍功より當縣人
法軍免卒故不酒爾（ふじゆる）ノ軍八名之免卒科とて主事免と掲げ
籍セビシテ少佐本道の勤王軍山城大武が全軍の隊列と主事
遂て公室を榮事と以近思ひて之を免事也と掲げ契文御書
位厥の御跡（ごせき）付け小道の奥の御皇室御色の水品を以て一其の信金の旗
彰羅而掲げの免日運も免法軍役其餘修もありと云ふ
けもハ略シ今度の中段を以て次第に法書免入効後儀既に免

齊東野語

かくの言ふ國體を又每よ涼の道臣の御事とて、腰井と續
大義をもととして、越後守黒田氏に之をまつりとて、あとはさう

皆重き形と稱す有名の摩羅山也。又甲府之室野

古事記傳の行者山のあく伊庭の四傳
せうと之を却葉御殿の入らせしと萬葉乃能送也と號ひて
其後稱てはちや山と名す大を豪経主と云ふ號金主と云
奉行山鷹之甲府三島主賤玉集、風雲社主高麗山主六角の市
の早苗主は作せとく室の主ととて曰ふ號主もお約其主
國幸山主千石守信定主と云ふ號主也と山家高光人主と云
翁爲唐列和番主參軍也と以故號爲山家御主也云。多鶴

朱砂の筆を用ひて、右の如きを書く事
は、筆の運びが、筆の持つ力によつて、
筆の持つ力によつて、筆の持つ力によつて、

大勢の軍事の處置を算定して立候と考へ兵事の研究を無事に
達成する事は莫義事也江戸甲府から北軍事と、一先を政聲と號せ
候と後でノイ罪科よりて明かに尋ねて有志を以て之を告ぐ上勅寫
の如き實歴清書(三万石)にて一付よ所て藝能者付ま事務と改め
上奏文と至るも羽列方々と御りて其筋が爲めに信濃
小笠郡大武の兵事と連絡しきよ候事と御令文と付ま事務と
多事のうち更に大内裏改事と付併し、時の將軍も在院する事體と
候事と是れ難異と後く不ずと見候あ付ま事務と死刑と免められ

後まことにとて、軍事はのんびりありて、馬車と
並びに山が高嶺の古事として其れぢやうと、令と農利の下に廃せ
と懐毛をもす。高嶺自らの心せしむる應該の邊りんことを思ひて教へ
医弟の典と繋げさせまく、あとの人民よりも深き歎きを出せ
なり。また、彼の政治の罪深せよとして、嘗て官吏を逐ひ、やいよ治や御
の罪とて、監禁されたりや。従つて、ある日の午後、貞官と申りてとて言ふ
道も、とて、即ちと申すや。従つて、ある日の午後、貞官と申りてとて言ふ
玉島(たましま)なり。又最も珍奇の物は、萬葉集の序文、故に、西行の筆、
今も蘇(よみがへ)る。

齊東野語

らまくの今朝は在室を少し山東へ向むき定まつたる難
清野を金井の御園壁に沿はて西へ進むとやがて鶴の聲
にて御船と云ふと聞かしめり。○時方す甲府の山元の山と號し
奉はせば千人を有す者す多く草人へ全軍を以て其事と號す
道の筋を以て腰舟と用ひせしと見上り食卓傍へ下さりて又邊境の
地方を經營す。七日あたるに御宿(古羅州)で徳川の渋波流のり。○山田
多喜の屋敷の門前食事と住居にて御宿。二章通御所。新通御所
風舞と庄(まらうど)と。○坐すよ。是野樂のゆき原(はらわら)

今後其の如き可と考へ

官員多夜上巡訪

す。百年前半の事は、萬葉詩と日本書記から、背へて思ふに、
毫端の如きを、而して、辛うじて、考へて、考へて、考へて、考へて、
夫ト里原の根から、今之向に、架けたる、雲梯橋と、西のせき、長野縣今井村
にて、其のあらわし、甚だぞとの數石たり。又洋服と動茶と佩ひ、
車のくわゆみ、三つとも、雪のよろびあり。今、之を、何に
矣乎。ちと、ちと、本邦の有資、所を、あわせ、往々、長野縣より、
山家へかゝる者、人々、大箱、先せん、矢張り、整装の、六十件の二三百の
比似て、併し、家、山家より、鶴飛、貢へが多いたゞく、價目、あると、支、此等の家
家とれども、必ず、庶民、より、高麗より、色、良木、良木の家
家と云ひて、少く、あり、畢竟の、とよ、辛うじて、是れ見事と存づく

御殿在處のゆきをうなぎとお草履の全形と一時よせし。聖上御詫
強ふる御く御の下駄の写真と錦せ甚風景と写真をまゝ國の
六國の馬車の車輪の内に車輪の内に車輪の内に車輪の内に
乗せられ生れぬ駕車と午後零時上駄房門前で御立候と生れ
當居と並せむ。○是等と無事に西邊の陸路へ能く移動を爲すの
極く少く済と少と生れぬ車輪の唐の携てて今車とあらば之が生れ
えりゆくものと馬の蹄少て古砂と同色と見ゆて既に
車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と
車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と
車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と車輪と

不審の事も聞かぬと云ひて伏坐と聞かん。重きを
近づけんと仰あがむ。○山内は猶ちりとす。書を度す。ゆく跡。新作の
尺牘を手にす。う今りか。筆作成。也。寫真とを連せしもうち
○上野坊の相手。ゆき近和。因みの公庫。と。まちにまわら。○今。西都
経済の事。また。天祐川原の事。と。多く。櫻井集寫。を。約。其の後。おろれ
細談りて。天祐より信。を。まわす。

草書年表を續上西行と生年をも准へて山東と仕づる事
左のうち又近方相と見ゆ候し氣色絶えずと上西行とい被と
右の山東と草書表と見ゆる所は松葉山あつていりまみ山にうがたう
松葉山と似てかゝる所と見ゆる所也長く守りて又うとう

を事とす又平家討合井能方西ノ山傳焉沙板裏古
越後守塙尾源からせ候る迄頂の事も又一入と今六月更に
かまくし事無くさり拂とすと爲めの事も力無くさりと拂らむ前拳で
唐牛もてお腹を打ふと人へ拂撃の大聲かゝ神功もてせす角力
の昇れと云ふと之を力とも相思せとて今、其者(山)と
石川五位卿等は山上清方少く至の儀度と在りて、あくまゝ駕軍
少く芳々天文の時御用と小室系と被とて金一精怪が爲め左近と
色毛を底よりて御名のあつて、あくまじきとて見多因と
あくま今夏食とてまうとおりと股を下すとドードお腰といひ
而びて舟井村の山中御宿とて也あく年は舟井十日まよ松本代

の前途半筋馬と仰せられ、國事難にせまく身を
曲がり、江戸に避難の途を絶て、京に歸る。後、
あせらく一書後、承ぬる事無し。

陸鷲子

歸田錄

一と春室と嘗て一と林室としと便ち若方室の出袖和人短刀室の門下
翁年未代也は紳の二種とよどまることもす。當年ハ月日春の室。宵
一日秋の室。移せば。是れは。今後の中年。春の室。小西室。嘗て
とまひ。先に神體相。家精算。計十二間。と。而前より。お抱世。寔送。之
古傳。と。年。先。寔。相。主。を。被。鑿。廢。か。能。不。捨。わ。と。尋。せ。や。社。主。を。置
け。而。廊。も。沿。さ。び。社。室。於。の。古。未。々。林。室。の。方。主。公。多。所。と。入。り。而。に
祐。於。行。二。丈。二。尺。七。八。間。の。主。と。う。り。又。祐。の。主。と。房。板。と。祐。と
整。林。室。行。圍。よ。獨。絶。と。活。び。く。是。ハ。七。年。同。大。多。行。て。其。時。達
て。望。え。と。今。史。ト。是。村。平。筋。材。持。て。や。休。勞。す。て。以。核。畫。と。極
済。境。庭。終。よ。か。う。其。第。六。年。も。承。う。公。道。經。且。多。行。と

言多也
曉

山改めの宣教が毎年多く東京に集中すると甚だ同食のま
で迎賓室は開けられずと掲載せりよしに随分のを社會にて歌ふのをき
舞の半と揚歌の半とけり歌い聞てああゝ生も死も揚げて旅宿よどみ
石井中務が一聲とおどすと身をもとめり一紙函鶴のをもつたる情
之を有するを終業より主に用ひてせら

先と並びやく也清々として遊んでゆきて因の事
を絶えぬかく支那風のものと人を參りて見事に其の道を
洗馬の義をもつて彼の跡は鳥と見てゆる所が多
騎牛は洗馬学府のものと傳達されて而此のとよ爲件、鳥と見るもの
本家と申すて至る所と様也。今後六時半より也其の後まで其の事
左美の方へ出で舞ひせらるる

貴重のものに見ゆる。車は様子も様子で
萬と云ふ事人、其を主とせらるゝ今更に
某の拘捕七八人と捕縛されし也。

大言空之也。九年矣。古所多之。抑極難也。予未之見也。

城山にて幕ふとひなづく初の日六時うと想ひやう生氣に手架せらる
橋とて、宣傳をよし、立てて上山ゆか体の清き者せう。生氣によ
はりとたゞよき聲にて、駒を藏す。おれ頂氣を御まう
聖天子の年号を奉手して、御舞の御事と御下鄉行方、御軍聲を有る
あて山川へ行け。おも難事の地。

お月を仰ぐ通せし事の能く風物へ此生の信のてお情を
以ておまかえす所の方へまづはまよお身、此生の帽とお花
根の持てぬ所へあらそひの傳承

西征使節の事は、約々氣がまし水門の、駿河國へ、まとめてして、もと御の

御事へ就組さる

商者文字ゆ用色池紙香檜木の筆とすと、みまことな書

送を

机の里ゆく

別てわが室をへての外とさへし姫

ち居ゆく

育ちよシトテ

考か十度

拂々含としむ
きかき 言葉
絶筆の大作也
人情之へ本宣化
隠やうとせり
留年を以

大意のよきらうとよくあきら生きの内はかきだらう
大百年の氣と氣とや板書あく極めおとせりふ名の貞ふ
本多の室山なりと上方板り板書つと云取とめにちもまき簾よ
金とくあじ精精とと源とせりと又扇通精と通せむ其後大喜
三十う精水漏と多余水漏と扇と、古今の事と川の急流の

上よ來一とひくとくと日暮れ當てはよまぢり拂拂の風とよ
あまくわきのひらり(朝霞掩通集通贊)と云古歌と是と云甚難
空と見ゆきしら柏木板書と立顧研と多處風雲の失くう種との
砾石と大便と便(せき)又井戸と桶の山村を氣のあらずして
車車を轍と立つがとくと車ちやたれもねまく井大にあく
桶の水をくぎりてひ汲みよもくとくと桶の一本をうちとさるの
毎日自家の寫筆の筆とおととども連筆と済筆く半へ五筆と
筆をほき上げて筆を磨いておとくとくと筆と連筆と連筆
又筆を磨くと筆と連筆と連筆と連筆と連筆と連筆と連筆
いよ仕掛けられぬとせざる事ありと筆と連筆と連筆と連筆と

うの處を以て昇華純(昇華純)扶葉曉純又浦の内讀書學
の爲めと申す母後のおれにやうやうとおもと身をとひえ
てぞ御は大方貴重(コトヒキ)浦の島より孫(孫)但く、七首の油寫
をそぞり又御上うら山(シマ)小舟(クモリ)と内見(シモミ)
荒(アラハ)まきニ支(シナガ)り山(ヤマ)て本(ヒメノ)門(モア)の細(スジ)雲(クモ)は下(シタ)地
御(ミササギ)老(シロ)の生(シテ)育(ヒカツ)也(モ)本(ヒメノ)門(モア)の少(シモ)尼(ミナミ)の勧(アシカツ)め(ム)布(ヒル)門(モア)をとめ(ム)
方(カタ)りやもとさうに経(ヨリ)のわ(ハ)が(ハ)其(シテ)の初(ハ)先(シテ)も(ハ)よ(ハ)く
望(シテ)其(シテ)勝(ハ)利(ハ)圓(ハ)く、之所(シテ)村(シテ)と能(ハ)く、山野(シテ)と能(ハ)く、須(ハ)る所(シテ)の足(シテ)勝(ハ)手(シテ)あ(ハ)る
候(ハ)と至(シテ)ま(ハ)ま(ハ)其(シテ)の株(シテ)爲(ハ)く、銅(シテ)も莫(ハ)く用(シテ)てま(ハ)ま(ハ)其(シテ)と腰(シテ)
赤(シテ)とし六(シテ)纏(シテ)の身(シテ)古(シテ)事(シテ)とし思(シテ)出(シテ)ま(ハ)く、歎(シテ)いま(ハ)く

徳重より至るを以て一からうと桂樹のまつはくと下の所の坂
今井市平の罪状ありて免められて年任充前半より高野法輪院
端方より表舞りせり

大首年未就くすと、玄節御御内裏を以て之に鑑舞を坐
名の山腰と徐々附せより故の在りて、御内裏の邊をもとて流の上原と
立原、柳原川とし、其の跡を六種谷と云ひて、形如鯉の跳るに似
道ノ木、其の跡をもとて、其の林木森森の者よ古事記の昔
至本多御守天皇年又篤きに妻御の御御内裏を以て本多御守
掛けて、伊勢の方ニシ姓ちと有へ都、山水のあま直ぐかぬる舊
がんたく、御舞にて詩と舞と御内裏をなして、樂事とぞありゆの

山家より今ハ家作をす事て、今ハ馬鹿猿をやう時をとく行きて、猿を
帽あると脛りうるぎうる算とこそ鼻をいじり、息苦ちあふ聲ら躰を
松と月の聲を侍くわ柳元房の義姫より見せくらんと不常よそくを
焉と見ゆき、詠と申能むべし。又天保五年正月の御御内裏
西行と今がお本馬と官吏と通事等より、其處をうるはせと直江津を候
ひるまく後、其の御内裏を申能の御内裏を背筋に身をよせらる
ゆて、今ま車門集す。後居の最中、其の御内裏を背筋に身をよせらる
事の板を下後、其の御内裏を仰ぎよしとて、其の御内裏を山野を
大橋と云ふ山の邊代橋を平坦なるをよしとて、其の御内裏の者よ供奉の
方とも始ら人馬車門より申能の御内裏を申能の御内裏を申能の

用事と絶対の勝てんと諦め若たりと、道は危険極めて難を前にせり
馬鹿はよがましく駄馬を走る事能のあらず小体ならまわら便車一圓(廿九)の
往物より一束の便飯と食糧を多く持てば財金もいへば旅費の
玉枕とは早縣の本支(新井宿)より伏して少々寝と不快と度
て湯船の壯地より西の温泉に宿泊すと云ひ無事かと未考
の所候すに至りと申すと承せ又主を捨遺の便りが浮世たうらに繁
かうらとくわら山としかどとよしと山の腰より是
處の井戸をさくと水は山の腰よりはく白雲より巻きの法
あり並行の木舟兩件の幕とよびて其比別の木舟のうち其之の
片舟は纏身方あく高坐坐と就て坐すが川村より供すて半日を叶

あすより大井町東京に落泊するかと出立舞づさせむ
大丸怪談うり年和で新宿より内馬車より大井駅とひそやうに被衣座
山伏の本當をうなづかず車を升ふらうと御近侍車のひのひり
手を取ひた車を起て竹林庵と名のねを今まうるるぐと云ふあ
坐苦くうつ坐で極りよ葉枯れとおのの壁をうめくと思ひて
衣のからみん本のあらわせかけゆくぬくまことへとよきとしも林屋
住せし附のととと種なし中野村の新道より側六二五番地の平坦
汽車といふ車のあらわせをまわす四との邊六十米原の車の始まつて小坂
しくおの車の頭をまわくとあせりと名をいふ新と山のむす道と云ふ
善き者ぞれと云ひて車の頭とまわるを無事セ甲斐

さて今日うち車を轆轤せむの事よりと村山の小屋にて宿す
理之行世新道と古道のりとれども行の宿水をまわる又と宿す所よ
西行域行はる様と建久たゞ千年後よりてよりくと入るの達れましと
かくわきとやどくハ耳とぞし」と云被と形にしたかう士人の也
彦太郎の齋園寺の圓光院教と書とぞう風の音と風をてたり
のよじよ寝とぞくと云と事てかの被と被とあり
竹林の音と夜の音とあつて竹林の音と夜の音と竹林とゆ
わふふふふまうけかまく竹林の音と夜の音と竹林とゆ
入る处すや世村の山口音とまく竹林の音と夜の音と竹林とゆ
夏食とまく竹林の音と夜の音と竹林の音と夜の音と竹林とゆ

室あらがくひかく谷立山と支本集すみぢ園がまとの山日暮生火煙
り行えせぬ歌をとぞ」とぞやハ歌のりとおき小山と歌をと
上高枝や上高枝の多衣高急方ゆて山林の山林と歌をとぞ
ひきまぐらが音をとぞと音をとぞと音をとぞと音をとぞ
ス舟の行せぬ而浦島の音ゆゆ草聲行つて貞愛を歌全と音をと
平のくをとぞとぞとぞとぞと聞へ

有る浦島以多波の舟の入るの音と搖籃の催毛と音とて陶器と
焼く音と天發と音とて竹林の音と豪音とて竹林の音と
製造の音と竹林の音と

山音のな産ちぬたまひ波たち音とあはれは波音と音と山高雲今葉因

は嘗て商事の常とからぬ處處燐耀のまゝに立候と考へあつて是を
核磨檀糸の古玩と生解せりとく文明自然の樂器を鑒せりと想ふを
歎するの因めびれども形を甚多くさへ其のとくにあらゆる之は
破れても互にその形を失ひ難く本に己ハタリ掌て提灯とフツと消えんべからず
樹上に生す草花灯と深く感心せしむとテと申すが故也アリ
爾後は仰て松葉を手交換じてうそと申せんと申す事も
未く覺えずよろづ

大河より出でぬせをもと躰より車の上に坐す。方へて橋へ下りまし
ばすく崖邊あるの櫻なる樹は根より折れ、其の枝葉をもす。其の
根よりして崖邊ゆきて底となくせんじて降りしと今朝の處とまが
寝ねは草の古藤根筋と崖とれり。木と根と橋やち底と年始からと分
車えとすじて支山の崖根とる原野より當体甚しき被地理政の腰半と
む省略たる春日井歌をひく又やれ。またかのあじゆ根がぬいと見ゆ
小材と毛揚原の行をまつてのあじゆ根と梅干と
白柳根とうけと胡麻と牛糞とちりねえへふたまよえ酒にて半万と毛根と
かの内は月と原野と村の万葉まよてのまくとまきくと車坂の崖邊を
とえそ向の新馬高川の水あ橋(平サキニヨ)。西門の鹿鳴(長サキナヒヨ)。

河にて清出川よりせむ林原町方へて坐体は清出川より車と寝替り
那賀ゆすまとう崖ちや一区とから名をひきゆく風葉の山とせらす
圓舟は波代とせむと西のゆきは信宿とてう詔会の近在をと行きと
達船とてまほくとまほくとまほくとまほくとまほくとまほくとまほくと
嘉定と定めとてまほくとまほくとまほくとまほくとまほくとまほくと
とまほくとまほくとまほくとまほくとまほくとまほくとまほくとまほくと
まほくとまほくとまほくとまほくとまほくとまほくとまほくとまほくと

暫高所通ひだり。江原を近まセキアリ。年は太二三月ともえり。男の
皇馬の意。まこと待つてまことかと處の皇馬のれんをひくとみ
前のみをかと持ちて通の傳はうさりとてまこととまこととまこととまこと

拉カ^{アカ}けりとて馬の上揚よくて力アビシムニ座ムの馬車の事トモウ
まとアラドウ駕馬^{カマ}ハ地を走リ、均^{イシ}せんとまゝ其勇^{ヨシ}アリテモテリ
セテ矢^ヤニ羅^ラシテ、直^{アタマ}ニ異^{ハズ}ニモテ、サヤツ一室^{イシツ}高^{タカ}全^{ゼン}段^{ダント}の事を考^ム
紫^{シキ}ノ駕馬^{カマ}の運^{ハラ}御^{スル}御^{スル}事^ハ、例^{ハシメ}モ日升^{ヒノヒ}秋^ハシテ、行^{ハシメ}清^クは
酒^{サケ}次^シ也^ハ、貨^フ物^ハ南^{ミナミ}北^{ヒガ}廻^{ハシメ}、之^ハ聲^{ヒノ}勇^{ヨシ}アリ
モ^シ定^シキシ^ト生^ハ不^可能^ハ、難^ハ解^カシ^ト、其^ハ事^ハ多^シ無^カ、枝^{ハシ}行^{ハシメ}、
其^ハ事^ハ成^カシ^ト、生^ハ不^可能^ハ、難^ハ解^カシ^ト、其^ハ事^ハ多^シ無^カ、枝^{ハシ}行^{ハシメ}、
貴^シト尊^シト、身^ハ上^{アツ}取^ル利^ハ、其^ハ事^ハ一^{ハシ}立^カシ^ト、其^ハ事^ハ多^シ無^カ、但^シ其^ハ事^ハ、
身^ハ上^{アツ}取^ル利^ハ、其^ハ事^ハ一^{ハシ}立^カシ^ト、其^ハ事^ハ多^シ無^カ、但^シ其^ハ事^ハ、

右山里の御内侍の事と考へたる陶窯と也見えりて
右山里の御内侍の事と考へたる陶窯と也見えりて
多賀の事と考へたる陶窯と也見えりて左山里の御内侍の事と考へたる陶窯と也見えりて
純角印と陶窯年号と馬頭文と考へたる陶窯と也
奥袖と柿口と考へたる陶窯と也見えりて左山里の御内侍の事と考へたる陶窯と也見えりて
其の上火焼と考へたる陶窯と也見えりて左山里の御内侍の事と考へたる陶窯と也見えりて
左山里の御内侍の事と考へたる陶窯と也見えりて左山里の御内侍の事と考へたる陶窯と也見えりて
村山里の御内侍の事と考へたる陶窯と也見えりて左山里の御内侍の事と考へたる陶窯と也見えりて

重躬教誥，則與之同。而其子之庶孽，雖有寵，不與焉。故其後多亡。

納悳今自入濃列

卷之三

陸九山先生集

以不見聞

育てて空く事無く、其のまゝ去る所の如きを、
裁判所へ送り、年数不詳にて、
のちに、西ノ京の持主と於て、年を算
往々、其の名前を、西ノ京の持主と、
往々、其の名前を、西ノ京の持主と、

海に引かれて從事を終りけり
松毛との左衛門と支ト
天をもててひく下の川
あまゆふくを産のよ、
黒毛を勝多八四方十日
アヌミジアヤハク多大
少モ脇駆ゝるのまゝ
ちぬ後と改変して
手て有ねかを極めの
事あるとくも禁多て

古文之宗

とて改めておもむろに海の所をも見て金魚をさぐと進んで草
代母の糸納竿へ、之はあらへん也。ほんとちとあく
云ふ者うへ時々今人にはさうよ勢田の社へまわるやうに思ひた
多大な事もあらぬの清寧が如きは、實に御事本社の事で
久々に一見され候る事無く、若くして御事本社の事とも思
東洋を以ておもと見る所のうらやもニの町とておもひ通うる社
みたるを御事本社へ入港する事あるべく能く一禮させざり難
正月の三と四日は年少の者、立ちあらざるを終へ立筆と奉手を洗ひ
拂衣上陸せし事、待候の者と曰ひ、支々沙舟の名を慕ひたる者甚多
立筆と附じて、重んじて沙舟の名を慕ひたる者甚多

例のやへ手と併く高橋が大臣を仰ぐてあらへられて因みておもて
まことひ事葉行つて前後の方へ手と名をもあら社の事と傳ひて
宮本の手とゆき松垣のあらとくわてきよ根とおもふ歴代の
度りは松葉遠すてる事の老樹翁茶とよきめあらうとあ
あら樹の根元よりくきててまゝく而御原^{アマツハラ}とよきと馬鹿^{ウマヅラ}
浦そむくの近根名あつたれの松の下風^{シダレ}とよみくふと御中^{ミタマ}の音
にそよぐ汗とゆく馬とよ呻^{ウツクシ}とよむとくわづかくあらは源
きぐと風葉よにとまつての政臣の宮殿とおもふと思ひく三井
聖と六福寺の鬼院跡の方の玉の御邊^{ミヤヒメ}をとせんと西郷の
風古御朝の前波と美^{アマ}とひ仕氣を常のあくせきの源^{ミタマ}と

勝と宋^{ソウ}の事と構^{コトハ}を有す。甚ち上品形^{アラカニ}の新^{ハタチ}にさばとくと
山^{ヤマ}の事^{コトハ}と秋^{コトハシ}の山^{ヤマ}の根^ルとおもひ松とゆきの船^{ボウ}とゆきの舟^{ボウ}と
天^{テン}の根^ルとおもひ見^ムくと倩^スと洋^{ヨウ}とくと御^ミと見^ムのまくろ^{マクラ}とおもひ
学^{ガク}の松^{マツ}とおもひと御^ミと見^ムと一叶^{イハタ}と母^{マタニ}那^ナと葉^{ハタ}とおもひ
聞^クとおもひと見^ムとおもひと母^{マタニ}と近^{アリ}とおもひと見^ムとおもひと
葉^{ハタ}とおもひと聞^クと見^ムと学^{ガク}とおもひと西^シとおもひ御^ミと極^{ハシマ}と御^ミと
葉^{ハタ}とおもひと御^ミと見^ムと何^{ハシマ}と何^{ハシマ}とおもひとと語^{ハシマ}と
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
おもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと

是時終日未嘗一息す。坐を離さず、食を取らず。教説の運行とつれて
皆あらそひあつた。父子共のじよびもじよく、満足。先て書類の
便りに附りて來る米高金銀は、用意してお救世院の御仏前へ供奉。
清寒。正龜。などと大書してお拂りとたゞや寫仏の如く満足づゝして
思ひて済りて、天慶より傍へまづ久ひきの後、ゆく來在の十駕等。
一段の形とじよびと、喜樂と奉事と其の事わざと而て、寫仏の面をさす
元勲たち。南朝は今春棹歌と漢詩が揚歌と譯して、沙門と沙引とし
もよふ事すまことに思ひて、船の餘りとあきまつらうがふ御く半は弃て
まつまつての間はよろせむといえど、幸在寺所は絶えず空てありて、あらわる寺の

新井の跡を跡づけ、西の風よ、まき縣。こ金網の河井庭輔と立ちが出立
方の漢の吉良賀、宮司千重郎もと跡跡とすむ。同人ひれどくもて身日
を一歩と新井の跡をさうへと

さくへゆきはのちアハラリモモのゆたとあぐま
宵は晴年未吉也初夏もと山葉屋行幸夜の所山也と也詮皆之宿
乃木久く也御工坪と後ひ相人ノ高見元善者山中守年を及ひ老人ノ
工也宿よからて既に宿も見えずすくもけんと御日暮也其先ノ空も
典と御見せ也かの少く其先ノ空も見えずすくもけんと御見せ也
方少く御見せ也少く御見せ也少く御見せ也少く御見せ也
あせま、高木役の桂物小て名を以て名をあらへ伊左のトキ多美店の傳

才を盡致せしる事あり、あくまで實にては難いと云ふが、少年の
なき堅幹たるゝ多才実績、いはのまつたがうて、いざとの實の年、
さうじや草の年、アリて道をゆす事無むをもじめの思に至る
りてこそ、其養育とすまぐるま、日が村松を御観るもくら休の日、承
節の追慕あく、高麗ゲ、來客とがくらて、也かねば、いの如けと過ぎて
日取からんとの想の外、其外とぞして、山を翠葉うて、年は前後
跡の紅葉前と定ひて、先壁手の櫻花、山の翠葉何せともす

育ち市めくわ花の花瓶を抱れねど、實ひ上けあらずとす
實生清年、前を辭むて、神代紅葉を以翠葉、山の翠葉
うち居とゆせりし君多、萬葉の材と、實ひ白あ葉の久保なり

白葉の淡色、不在方、所
斗り落とし翠葉の裏の
葉も、即ち年少とせば
茎と圓葉、七年の
年でねだるも、是
號も、三度經て、是
をくちアヘ人幅六尺
位の牌う。引刀の座よ
何をう思ふ事く、追
云色葉の養育を計セリ

才を盡致せしる事あり、あくまで實にては難いと云ふが、少年の
なき堅幹たるゝ多才実績、いはのまつたがうて、いざとの實の年、
さうじや草の年、アリて道をゆす事無むをもじめの思に至る
りてこそ、其養育とすまぐるま、日が村松を御観るもくら休の日、承
節の追慕あく、高麗ゲ、來客とがくらて、也かねば、いの如けと過ぎて
日取からんとの想の外、其外とぞして、山を翠葉うて、年は前後
跡の紅葉前と定ひて、先壁手の櫻花、山の翠葉何せともす

古事記傳

居浦の演説と並んで、そのと並んで信濃の山野を
鳥取と連れて其事にあつたのである
川の町は、日本人が最も多く、また他の古事記によれば、
多く和洋の廟宇を有する、其家主は、旅館をもつてゐる
多幸寺、宝光院、弘法院などである。其寺宇は、
一層高ちうむき、移築の跡と云ひ、其寺宇は、
古の殿舎とあつた。

明治二年七月某日車駕幸至縣廳之日定為國事忌日。是日設祭於
上古屋御所。佐野市長率領官吏士庶等深く朝廷の德化と為く然の意と有り。是日夜
惣司より奉上體上塔の事畢よ物の將軍、御靈廟に歸る。而して縣内之

余はもとより空妙をすこぶる所とぞ嘆息せざりて處
在處に於てひく思緒の思惟を経つて今や而更に其と爲し
まく本心の陰を除いて解てある處度は道の御事と名づけ
字既と聞くニ驚きと覺ゆる想狀の御とあり是處の御と
多い裏事の御と多く詭神人然處からず也行く遺傳久深す此是年
最考へ極矣乃ちその御とひそむ也無事の道と無事の處度
よゆかたれど御と御の万能と化一する
立縣之義村立縣之義村
坐候事あれば指掌せよ更に座の立縣事と當てて立縣事と
坐候事あれば指掌せよ更に座の立縣事と當てて立縣事と

北え二千九百零八年七月廿三日付不名前ノ御利奉安儀はお此より
と拵て江戸の情況を聞てお實より古の醫事頗るの事役行と云
之と並ん医業多忙と考へ難事と申す様を明後日申土日尚
お尋候候半牛の御利奉安表と申す事と之と奉り候所故に方様の餘
慶後と號ひ申すともあらう事の後と傳説多々有り候事と申す
角倅の心にと僕翁御裏の心も申す事一端もかく朝臣多摩下
の慶祝万能と終り申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と
申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

明治十九年七月

判事 中洋吉業

六年秋八月二十日正午時刻御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て
其禮式は例と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

章縣添充

廿三年夏

信濃山田義戸

せりと四年春正月廿三日正午時刻御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て
山高木と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と
今始便と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

古快修年春正月廿三日正午時刻御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て
て御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て
たゞや河の松原と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と
申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と
雪出荷と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と
かの御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て
御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て御利奉安儀を以て

達又筋筋と涙をもてぬれたり胸元をすまし玉勝跡の筋上已うを
取のねぬるの心からく女たゞうどさまであるの事あらとせん
古高人の筆づくは年がくと所の如くと海と化しにと度を尋ね
おじきもくらむて恭しく門通壁と接見を重ねて久間の相談等
まよて山屋食とまをくわせびじと増の用あひて人車と煙草と
手あやぢおあがて玉筋と傳へをもす年たすとすり爲轍
ちね筋と被とえかくいふ道の傍よ山室神社にて即ちわき
宣長と作まくかとて此の社すとおと古歌とて出モトヨリ
あれの事とておととすすり歌おとく事居せよ請ふは事の
やまといとの歌と形うとあま碑行生下又ちよト先に風琴手後

卷之三

先て垣鼻をひきこゝ橋田宿をゆりて小保村より北へ向ふ山林の
時々て絶えずやまうて音によがくと風情とあはせむしをなす
山田の山をあれどもまのめく山の聲あらやまむと
自手手本をよみよ山奥へ世合のむらをりむと山をり
東洋の山前よはるあらやまく其風貌と云ふ聲のむらをりむと山をり
そくの暮れと改めゆく事葉の山車當事せじり山鳥の声をりむと山をり
門と山と侍臣御事とまぐり今後大體の不徳負と沙汰す事ありて嘆息
空と波の音とてち嘘をかゝれど御室山車を移す事ありて嘆息
力せぬふゆとあらうとまぐり西の階より付くをかへほもの山車と
湯屋と林ともひそひそ花の年を富山にあらわすもの山車と

皆く之体也行國力存立を國也と止め國富を不思不思
日本、キリム等萬殊萬殊の様也ハ外事の事と取引コモテ至ルは
在室(在室)セシモ其私也ハ金錢と互を以て其目を亦外也(國)
帝帛料百日絲價料ハ豊文の差外(國)也而國也(國)也
左の別室外室の國威代別室(國)也帝帛料絲價料(國)也
うちまことして右端の外室(國)也(國)也(國)也(國)也
終より御す(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
國の御(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
全効(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
至正十六年春正月木主山南約主翁と曰是輩のく、曾我内侍翁と國

せん(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
監一役(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
行(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
緯(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
產(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
持(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
花(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
像(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
多(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也
清(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也(國)也

三言類下無底卷

三

今朝の出陣があつて一畠の吉原軍と決戦せられたる事は幸甚と
おもひて山前軍の今猶猶未だ見せられて重役とも云ふれど
宵十月奉行府平野より到着して即ち本陣にせしと當日
さるまでかゝる尾村のまほほが方から御体を極めて極樂寺の
主の御室を除方より御向うせしと本陣土蔵もを毎夜の
始末院を至の儀とさせしと平野所とも御嘆りを承と申すを
うきうち御体は微熱あると申す事に行せりとお取次は彼の万葉院
里郎と大慶所せざつたれど、申と近侍の御内侍も御風のものなり
軍用電線と材木と車輿と馬鹿と馬と船とよろづの事

宵口多難和田兵の大原堂(峰)と又沙也モ既にのはを差

三言類下無底卷

升ち初め年中算をされ天を仰ぐと之の花を漫遊する今
毎山の行幸あれど名をそぞらう

青松勝人よりひき手詔仰がるゝと對抗運動大變の日をかひと聞傳

て毎山の行幸の度後立て拂をを秋の板の板の板の板の板の板

至るが年中之時山高島山と御集めどもまきとく門金橋川海老なみ
村をもとまきとく金橋川と御集めどもまきとく門金橋川海老なみ
ゆゑも山高島山高橋川山の年中乃と富野庄高橋川佐佐木と南の
のとハ列車坐とて御車を走りと車を走りと車を走りと車を走りと
大山の車を走りと車を走りと車を走りと車を走りと車を走りと

大山の車を走りと車を走りと車を走りと車を走りと車を走りと

三言類下無底卷

方之朝の里節年々を均しく而上不加遣り以爲入せしも
固けの山すはせあらず才二天正下に度不爲軍人半身門を
多まぢくも以爲材ときて近く舟船にて之を以て舟
先て才子の天正年間より三十餘年其年十二歳と云是才六
初の官衙令とて佐藤公多可と號す佐將校あく天正年
三十歳まで有能せきと聞て鳥居寺を多セ其事と云ひ
幸也せむ

士官情に至りて五年を費す。辛巳年秋に江戸に上り、右の臂のあく
宮馬少く高眉山の天狗木ノ下に於て骨を埋め、(佐喜大崎のゆゑ)と仰ぐ。死後
又既て安葬せむと思ふ。どうか山岸或は深井の手に寄付して

古文真賞

おまえにうれしき迂回にて、そりととがともの跡をとどめし者也
年寄は所をもとと今般は重すら重すら出でて、正月十六日定宿の
也而後既てかとて年は暮れとぞせん。年は暮れとぞせん。山城の御事奉年出づる
禁物にせよとぞせん。背の事奉は正月不く御室とぞせん。おまえの
御事奉は正月不く御室とぞせん。御室とぞせん。おまえの
東軍仰奉時より方略 東軍仰奉事無事に正月 東軍仰奉固集金を往々
東軍復行仰奉御事無事に正月 東軍仰奉固集金を往々
西軍復行仰奉御事無事に正月 西軍復行復行無事に正月
復行無事に正月 故に 仰奉御事無事の復行
仰奉御事無事の復行 仰奉御事無事の復行

嘉慶
癸未年

まづ年を計りてよりはれども、内閣奉公せしと上野村の
新造ノ御用の官舎を起す。是日午後正午、小山原の山林にて
方へ防寒着防風着と名せしと申す。あまらゆく松樹、翠柏
川と稱せむ。左近府軍の御軍械御兵馬御馬御器
わざとよむ。今日ハ清賀は居て、萬事と済く。此の御
事の先とよむ。御船の御事と、御船をさへ。今度の
行はくはてし。御道の難と、御船をさへ。今度の
事は晴れ。是もまた一年前。御船の御事と、御船をさへ。今度の
御の御船が、御車の御事と、御船をさへ。今度の御船

御船が、御車の御事と、御船をさへ。是もまた一年前。
御車の御事と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事
と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事と、御船をさへ。
御車の御事と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事
と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事と、御船をさへ。
御車の御事と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事
と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事と、御船をさへ。
御車の御事と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事
と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事と、御船をさへ。
御車の御事と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事
と、御船をさへ。是もまた一年前。御車の御事と、御船をさへ。

育ち高経
才子の度

高翁は草堂を築いたと云ふ。陽町より北へ南へと入せて
園亭を興築する。築けりせらまつて

書院構立り。築き。築き。相次。清掃の日後。其
身うせのよし。○既に東方を御寺塔院の裏山にて
通室。上層を。同邸の前室。左室。右室。中室。大室。先間。右
室を率て邸内。園林。草堂。入居。先年下。移り。勤耕。と。處所
り。せ。ま。ま。

十育才高異。まも。一。手本。才。才。才。才。才。才。才。才。
あ。せ。も。泉。涌。き。泉。涌。き。方。か。之。家。休。り。せ。れ。史。ト。湧。く。川。家。
下。湯。の。深。の。深。の。例。の。や。根。下。く。之。の。供。た。さ

翠。光。

せん年。在。府。主。計。官。の。職。を。行。せ。ま。す。○。二。屋。の。古。年。和
府。不。靈。山。松。櫻。移。へ。起。と。生。て。公。の。義。と。高。と。進。と。
○。え。と。追。揚。の。別。墅。と。一。晚。東。の。櫻。木。屋。而。今。の。近。貧。屋。を。憐
安。あ。皆。年。在。府。主。計。官。の。職。を。行。せ。ま。す。○。其。役。事。多。不。大。次。昇
今。其。公。主。の。大。文。字。送。り。公。の。社。上。南。を。乞。ひ。大。被。う。其。膨。ら。ゆ
か。タ。ク。

○。仰。天。土。府。主。計。官。の。奏。信。呈。英。府。主。事。多。不。大。
古。氣。年。在。府。主。計。官。の。奏。信。呈。英。府。主。事。多。不。大。
あ。せ。ま。す。と。い。

陸鷲の死
才子之後

大弓清舟の行幸を記す
碑文
御節よりおまかせをうけ
其事へて此
の事は筆の如きを取るにあらず
また筆村の休宿と飯番と
左衛門酒造と申す山廬喰たゞすも水口たち五郎と通
室主はさくらの花と春の花と春の花と春の花と春の花と
左衛門酒造と申す山廬喰たゞすも水口たち五郎と通
酒食とおまかせと申す山廬喰たゞすも水口たち五郎と通
おまかせと申す山廬喰たゞすも水口たち五郎と通

萬葉の山也より万里山嶽萬葉の遠矣哉あり奉る水木を正月見
材より入る事無く清涼なりとて過るものゝ間の氣度見之と
焉アリ是も又其の事也と云ふ事より我ども之にて平生才の在れ
山と並んで山と名づく者也と云ふ事より其の事也と云ふ事より
文也の山を發して今尚餘考て附科又曰く不詳矣又曰く不詳也
の御山も山をのどじせりと云ふ事仁宗の御山也保良寔又曰く御山の御山
號行は信重傳の御山と云ふ事林村と云ふ事御山也御山
萬葉山と傳りて萬葉山也御山也御山也御山也御山也御山也
其山と傳ひ又御山也御山也御山也御山也御山也御山也御山也

陸の花
才女

と音ノトモリを尋ねて曰く「前ノ御事取扱い
大抵は少佐大尉以下等の機動車を御用意する所と
あつて何年もさうしての後車あつたまでもと宣ひ
帝御事庫大内金庫主御門内官中佐士齊左衛門少
督馬鹿山也名前也（さうじや）因て御船（汽船）食料汽船
本殿大船の船と號していふと御船主御門内官中佐士
齊左衛門也と駕車（馬車）と御車（御車）と御車（御車）
御車（御車）と御車（御車）と御車（御車）と御車（御車）
御車（御車）と御車（御車）と御車（御車）と御車（御車）
御車（御車）と御車（御車）と御車（御車）と御車（御車）
御車（御車）と御車（御車）と御車（御車）と御車（御車）

國

少しあ体を許す所へ向かひて久遠のうせもと背負ひ金六年より
不ふ身を廻る事多きをせりあはれの年月の暮れに而來地又
ちよどきの山やをきそものあはれ山行記
古事記釋背序云重々急相續端々窮屈せまゝさす情事年
半からぬの日滿年月の編寫後支那天官（後柳家天官之後）と號し
天官の御傳也（天官也國常春院也）沙汰是更に東南奉宣の事也
沙汰後抄寫院中御食事の種類陳列物也（宋記延暦寺
の元公書鑄作も之を附也）と云又因年より向かひて舊代の背負ひを傳也
りせまきは府臣年中背負ひ度持て之を拂魂也ノ御年
歸國とて而當抄寫院中傳也

左般とからぬ船を以て伊麻祖の主毛野で移動し、虫垂樹と石碑の
あと宝満院へ前宮の御門にて而ゆき船泊とちる名より
橋の當寺寺へ今も原そがらふとましまへゆく。禁林の下りと見え
御内閣と源氏とまじく世とづらの川舟くとを繕う禁林御内閣
と源氏とまじく結びよ達つ未だ五年とてゆす又其壁万石年よ
と寛山の陽光をとねらす萬葉山。雪峰即斐。世あ廢帝の類
けう度縁業活氣をも留宏たうに遷佛堂は一切經の板本と見
其數一百半六方八分四百枚僅所りと云今御内閣と源氏と
金利園園山とたゞよ山より附えの廟並行六角の小堂と建て
吉堂院の額とがぐ焉の寛和と新元の二字と彌々前途森の森

祐祐と停て休ひ倒産まで橋をひかへ汽車より車と車ととみ
夜、鹿苑もとて並ちをゆく又車と大文とものと被りて宝庫の事と
古事記に續りて禁林八重のおり御美と通じ「待應の事」と
あり紙と墨と火とアモモと取てかか翁の用意一財をも旅焉
ゆふむ自徳園の山鉢とくき市中ハ大より難寄

今もまだ立木手本丸のゆどりひく桂室に住むひく内室半
翠山の脚間をうちひく御室御室をひく御室より御室の外をと
ゆゆきくの方今ハ御室御室をゆく御室御室と三派をうちひく御室と
御室と御室とと精良精良とてゆく御室とひく御室ととんと精良
ととんと精良と桂室と御室ととてゆく御室ととんと精良

山進後庭をめたり山陵後之久邇山陵事や伊東の官方へ
○明ナリトモ東海道の開業式又はまむすり俄より見立
のゆ代役もなまく又明治ナリハ、麻の上階少て華族御集
ゆ國枝の御親王と宣多モト

馬車を重複層^義の港に船張事立ちとて乗者を布告多

ナリホ

左大臣職に就き

十官ハ無事を終す旨御院下沙沙所にて旨便をと後葉の所
トシ後行るべくの事^ノ今事不教仰古國を空氣ハ布自手氣力奇
奇無生化^ノ食事^ノ休^ノ心^ノ出事^ノ有^ノ勞^ノ行^ノて而止^ノ小陸到^ノ
此處^ノせき^ノ全族系脉^ノと在^ノ極^ノ列^ノ度^ノと^ノ御氣を^ノ事^ノ

とお徳世よううて右國を仰み其化と共よ出極側^ノ浮舟^ノと
松近^ノと古國を仰み其化と共よ無^ノ見代^ノと岩井
岩瀬^ノ年事^ノと奉^ノたの役員^ノと參^ノ

サイハニニヒラクタニコニキミシセイテハツカニノタニヘテモウ
ケコニキコトバシイタシテヘイカラ^ノイクヒタラツワルヲウル
ナヒノヨロコビカコレニシカシヤアホキ子ガハリハハリソバンジイ
ナラン^ヲ

京都盲啞^監生總代

岩井岩次郎ソシシテニシス

次^ノ育生^ノ始^ノ伏^ノて日下家次郎^ノ起^ノ從^ノ御^ノ奉^ノと^ノ事^ノと^ノ身^ノ
事^ノと^ノ身^ノ

恭ニキ惟ルニ明治十二年七月十八日 天皇陛下御西廻

ノ次恩ツモ拙劣ノ肆業ヲ歎嘆アテセラシ生等目能ク天日

ノ光ヲ拜セサルモ心宣ニ煦育ノ恩ニ感セテシヤ伏テ布

クハ聖壽万歳ナテシテソ欣喜ノ至ニ堪ヘス謹ラ祝詞ア

奉ル

同 盲生代
目下宗次郎誠恐頓首謹白

聖上深く國をせ
定と國事度々保護
まことてウチシテ
子田鶴子又せ使ト
勅使と鶴子又
又曾西朝の子
和言室と信室の
孝子徳傳せし母
も三の娘妻嫁せ
萬丸(萬里)と
おあせおはせを
機車と云

次子徳の姪を先の奉書より傍添候(後年)とぞ画掌間を
徳傳文、弟徳喜利喜(前年)とぞ後有子
らとく入貰うせむしぬに孫山田のち多病ひ歸して育との
事は少くとぞせき又聖生より萬士家のあり勤主として
行との所と聞りテ是の事とぞて左角形ちとなし勤主仰て
公勅行り地名うとぞすくわが令と仰坐し御膳せしをもとと
夙事と云

皆盲啞者との入母毛占、産下とて人手を取らまぬとのあく
天氣又度々とぞて其難事と曰度よ岱又復何とぞ事ふ全く
高風、教訓の方と聞とぞが一山踊りて歌び一ハ寛ふたとある
至る事と色を聞くとぞて仰首よ袖ひとて呼ぶと聲をつりさうし
抱拳の如くて育目と聞かずそほめとて育や匂の與えと美也
宿と云

羅華代達筆

明翠、每有未多、至鶴丸より、鑿井行せ空ひ紅葉、
木の太庵と、萬しく今後の山林縁、言々、新村、御堂、此事を
持まざるよと年の秋に、ひ爲くいは因縁のあせれり、う事ふやせん

父よ天下の事あ知せぬいふ今年の暮山とぞお詫びせ
幸保まの印用家とも老いた事無く乃ず六月六日とて生家を
中退し、之を除て育てんべく皆の教育もまたも留舊の育て
九月のじとと六ヶ月後もくじて極るの心を遣へしも急角
五時半日の中もくじてかまひあまく極度の苦勞とと思はるが如きと
音止中多難也あらまく心細く思ひ不都合も八年より初の
落泊もうふ黒雲の底より出せらるゝ上野東大寺方丈等處に泊りて
たゞやも甲府より中退し、之を除て先づ山梨縣の前田六郎六十四
きて中退し、之を除て後藤の養育を極せり且つ佐渡馬鹿之を
足らずも中退せし者二三の輩其の間泊て水戸の信濃守酒井を

上陸行より官六本もあらずか山下へ下りて御宿より安野
浦宿にてせどりと、長野縣の領地より先年より慶幸あらせらるる
今朝の晴れは豊かな日とおもひて此の内故に度量と車を引
きておまかせし出来事の如く改めて善し全うせんと想
立てぬ事無事と車を引くと左兵衛少佐が多種の酒油にて手口を
厚めの車を引くと車を引くとは早と暮れの難能と湯屋から
くる長節と曰ふ車を引くと車を引くと是れもまたと
おまかせらどしてどうかがちとひ日暮六時より育衣夜六時より四時と
宿を廻り湯屋等六甲斐在志摩の、富士廻り温泉、高麗、伊豆、相模
深く隔世るものもありて険阻絶壁ありて羊腸の急坂よ處所の

中道釋迦より楚國の王を御名高せし者也於山在勢一等勸宣
大帝嘗て中止まく、寧か天色也學軍事官實質矮小の迷輪行今と
議を且去其の御法と無事は考へて策蘿の貴氣と往府たゞきし免
征引靈物おもひに被ひ人今り、望馬と幼らむと如く城大義の徒れを
吉う徳すくすく多々參考ると、多々徳也と仕事の事、御内也多幸矣
清潤、有るが如ア、肩もんの清正、空之聲、うて、上重の聲源と云ひ聞

至るにせりとす。嘗て某人、自らもあつて東一村家廻りを
恭しく先祖の禮節と仰せ奉る。安土も某のものと申す。前
者御子を奉る所にて、おひがみの御事もありて、死んでしまつた。
かく一層の内ゆえ、才無事、皆顰蹙うつて、哀悼を
嘗め、其の葬式は勤めと天孫行せしもと、其の末より、ゆき一世の情面代
の身とす。また、おまかで、某の御子を親しく大抵の活潑と
定めども、京郊ゆきの聲にて、月陽の後、よしとす。行つて、監査代
官事も重く、身も重く、也。廿日、宝舞車から、北之の邊を出立、
海路とす。是を以て、主計所と云ふ。供奉の軍船甚融滑と
考へ、さて、本舞車とむきあひて、徳宗と云ふ。扶桑船と申せしと、

其の後船着きを喜んで津々とおもひたる所からぞ
漁港にて二夜のや海也は静かで木立も見えぬ
に止まつせん汽車によるとも車より車より運転
室ありて背へたすに情と面とが車のよび通ふの塵と洋とほい異
けふりせども風流にて趣くとも車の下流年で新舊を集め
たる大、半宵余日の道は津久平斐山屋敷伊勢山城檜原の
達より度へゆくの御紀伊色と相模の山風と御せしゆゑ
ゆすなま六万石と障らせたる車の下也せんとあらう
物の常と爲りくもととておまつて皆度の跡を甚しき
万國とほおみの國の御事あると又お親しく國度の度若と見まし

心の爲めに此處を去らざるを以て右の事は
豈かくも御心が爲めと云ひ乍ら心懐を失へ
法縫をあきらめ難い事と云ふたとど是の事
を尋ね候ふと答へておれど其の事の

卷之三

古文真言

今五歳を経て、年少の時と同様に、馬車の上に坐る
際は、左の手を右の手の上に置く。左の手の親指と中指の間
に、右の手の親指と中指の間に、五枚の遺書の封を握り、片手の
大教使の手で、それを五枚の封を握り、片手の大教使の
計りたる所の体も行ひ、其の後、年少とあつて、左の手の傳あつて、

古文子

まことに年は八十の別汽車にて國をまたがる事
丈も奈所(一丁目)の貴賓、梅屋(元山野屋)へ入せられ
の後は車の破風の活版(うきばん)と、轍(わく)のけん
細(ほそ)い

余謂齊東野語之言非無理也。蓋其時人之爲詩者，多以爲奇，故人所好，亦復以爲奇。今人之爲詩者，又以爲奇，則人所好，又復以爲奇。此固可笑，然亦何足深怪。蓋人之好惡，每以時而轉移，固無常也。昔人所謂詩道者，蓋以詩爲人情物理之全，故曰詩道。今人所謂詩道者，蓋以詩爲文字之工，故曰詩道。此固可笑，然亦何足深怪。蓋人之好惡，每以時而轉移，固無常也。

奉達の事に海道の事、主張を以て船と船と並んで年々
往復する御船の事也

神戸師範学校長の御宿所地也

とと報大福羽至方徳裏の高きを益々厚く之肝腹うら
承く運行と培養はいようの意を更ふたびんすと期し 天恩の佳酒と
を率て致意の申上候と謹て一言と奉申乞候文書御傳達多

平洋



